

## オアシスからの便りーサウジアラビア、ワーディ・ファーティマ

### オアシスの変貌

半年ぶりにサウジアラビアのオアシスを訪れています。その目的は、オアシスの最近50年の変貌を調べるためです。

わたしは、アルジェリアのサハラ・オアシスで暮らしの変化、オアシス灌漑農業の変化、社会の変化などをこれまで研究してきました。その結果、多くの若者が孤立した小さなオアシスから、サハラのオアシス大都市や地中海沿岸の大都市に流出していることを知りました。

サハラのオアシス農業も、この50年で大きな変化をおかえています。水の供給源として1000年以上も使われてきた、横穴式地下水路(アルジェリアではフォッガーラ、イランではカナートなどと呼ばれる)が廃れ、今では地中深くから水をくみ上げる揚水井戸が主流となっています。アルジェリア政府のオアシス振興政策によって、多くの揚水深井戸が掘られてきたのです。

サハラ・オアシスには必ずといっていいほどナツメヤシ(*Phoenix dactylifera*)が植えられています。ナツメヤシは、ヤシ科の植物で、その分布域はペルシア湾を中心に、砂漠に点在するオアシ

スに広く分布しています。高温・乾燥に強いナツメヤシは、オアシスの暮らしにとって欠かせないものでした。ナツメヤシの木陰は、地表面の温度を下げ、湿気を保ち、穀物や野菜の栽培を可能にするのです。その実であるデーツは、乾燥させて長期保存が可能なおうえに、糖質が高いため、オアシスの人々に貴重な甘味を供してきました(参考:「デーツの名産地ーサハラのオアシス都市ビスクラ」田中ほか編『フィールドで出会う風と人と土』2018, 29-33頁)。

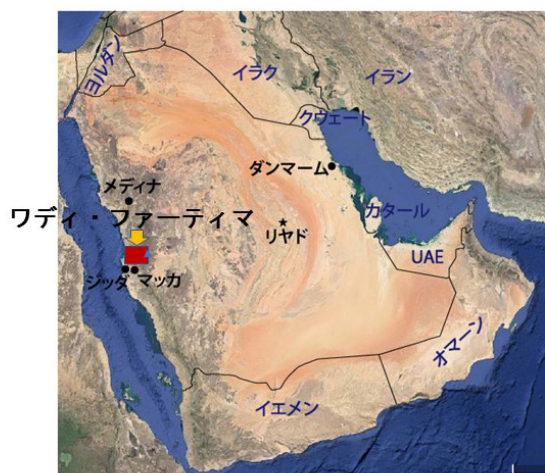
ナツメヤシが列状に植えられた間には、主に自給用のオオムギ、コムギ、トウジンビエなどが栽培されてきましたが、近年では換金用野菜の栽培が増えています。

また、物流の便が良いオアシスでは、収量が多い特定のナツメヤシ品種栽培が盛んになり、それまでおこなわれてきた多品種の栽培が減る傾向にあります。

### ワーディ・ファーティマ

このようなオアシスの変化が、他所では起きているのか、起きているとすればどのように起きているのかを知りたくて、サウジアラビアのワーディ・ファーティマ・オアシスまで来たのです(図1)。ワーディ・ファーティマは、サウジアラビア第2の都市ジッダ(ジェッダ)から、東北東に直線距離で

およそ 50km のところに位置します。ワーディとはアラビア語で季節河川を意味します。ファーティマとは女性の名前です。



図① ワーディ・ファーティマの位置

調査チームは 9 人から成り、人類学、地理学、考古学、建築学を専門とする研究者と、砂漠の文化に関心をもつ実務者も参加しています。留学生でもあり、日本の企業で働くサウジアラビア人青年も、コーディネータとして重要な役割を担っています。私自身は 2 回目の調査となります。

この 50 年間のオアシスの暮らし、農業、社会の変化を知ろうとした場合、いくつかの方法論が考えられます。今回わたしたちは 3 つの方法によって調査を進めていくことにしました。その 3 つとは、地域の人々からの聞き取り、衛星画像の比較、

過去の記録との比較です。

これにくわえて今回の調査では、様々な専門をもつ研究者と、豊かな感性を持つ実務者が協力して、現ワーディ・ファーティマ・オアシスの現状と、将来のオアシス生活のあり方を考えるためのヒントを得ることも、私たちが共有する目的でもあるのです。そこには、ワーディ・ファーティマの人々の考えを、存分に取り入れることが不可欠です。

日本人研究者による、海外調査が盛んになりはじめたのは 1960 年代以降です。多くの研究者がカメラなどの記録機器持参し、世界中で広くフィールドワークをはじめました。今回の調査では、故片倉もとこ国立民族学博物館名誉教授が、1968 年以降に撮影した調査地の写真と現在の状況を比較しながら研究を進めていく予定です。

片倉もとこ氏の研究によれば、1960 年代末期には、すでに大きな社会変化が起きていました。ワーディ・ファーティマの人々のそれまでの主たる生業は、遊牧でしたが、当時すでに定住化が始まり、多くの人々が農業や商業などに携わるようになっていました。また、農場主が、マネージャーや労働者を雇用して、作物を生産する企業的農業もすでに現れていました(『アラビア・ノート アラブの現像を求めて』片倉もとこ 1979)。

## 乾季と雨季

首都のリヤドで関係諸機関にあいさつをしたのち、調査地、ワーディ・ファーティマでの調査がようやく始まりました。

まず訪れたのが、オアシス灌漑農業の命ともいえる水源です。ワーディ・ファーティマ地域の季節は、10月から1月までの雨季と、2月から9月までの乾季に分けることができます。年間の雨量はおよそ100mm程度。もっとも暑い6月の平均最高気温は44度にまで達します。

その一方で、もっとも涼しい1月の平均最高気温はおよそ30度です。雨がなく気温も高い、乾季真っ盛りの5月に見た、ワーディ・ファーティマの風景は、灌木こそ生えているものの、まさに乾いた大地そのものでした(写真①)。



写真①乾季の農地

水路も渴ききっていました(写真②)。



写真②乾季の水路

ところが、今回(12月)に訪れてみると、大地には、ところどころ草が生え、干上がっていた水路には水が流れています(写真③)。畑では、作物栽培の準備が進められています(写真④)。

とはいえ、ワーディ、湧水など自然の水源地の利用は減りつつあります。その要因は、多くの住民が指摘する、湧水の減少です。近年では水がまったく湧かない年もあるそうです。1960年代末に、大都市ジェットへの水の供給のため、水利公社がワーディ・ファーティマにおいて、多くの湧水の水利権を買い取ったことも、自然供給水への依存度が大きく低下した要因です。



写真③雨季の水路



写真④雨季の農地

## なりわいとしての農業？

ワーディ・ファーティマではどのような農業がおこなわれているのか。こうした関心から、ミシャルさんとアリさんが共同経営する農場を訪ねてみました。



写真⑤ミシャルさんの農場

2人が経営する農場の広さはおよそ60ヘクタールです。畑ではナツメヤシ、野菜を栽培し(写真⑤)、2頭のウシ、200頭のヤギ、300頭のヒツジなどの家畜も飼っています。現在、作業を担っているのはバングラデシュから来た8人の労働者ですが、中学生の頃まで、2人はイエメン人の労働者にま

ざって、農場で働くこともあったそうです。

収穫した農作物の用途は、親族内での消費がほとんどで、余剰があった場合にかぎって、販売するとのことでした。飼っているヤギは自分たちで消費するためのミルク用、ヒツジも息子さんの結婚式で饗するためだそうです。

実は、2人が農場を本格的に経営しはじめたのは、それまでの仕事を定年退職した3年前のことです。それぞれ警察官、電話会社社員として働いていたそうです。

片倉氏がフィールドワークを始めたころ、ワーディ・ファーティマで農業に携わる人々の目的は、生きていくために必要な食べ物や収入を得るためでした。それは、個人の農家だけではなく、当時すでに芽生えていた企業的農場経営においても同じことです。地主、マネージャー、労働者、すべての人々が生活の糧のために働いていたのです。

しかし、私の目に映った現代の農場経営は、主たる収入源となるものではないというものでした。

とはいえ、収穫物は、家族や労働者たちが自分たちで消費し、世帯の経済にとってまったく無益というわけではありません。また、余剰があると販売するとのことでしたが、その量によってはローカル経済にも少なからず貢献している可能性もあります。それにくわえて2人は、「先祖から受け継いだ農地を守るためでもある」と農業を守るための文化的価値を大切にしているように見受けられました。

ただし、農場で雇われている外国人にとっての農場労働による収入は、祖国の家族を養う重要な金銭であり、彼らにとっての農場労働は、なりわいの要素が大きいといえるでしょう。

2人の話のなかで、興味深かったことは、農業に対する熱意の世代間ギャップです。2人の子息は、農業には関心がなく、たとえ定年後であっても、2人のように農場経営をおこなう意思はないようです。ミシャルさん、アリさんは、子供の頃、農業に触れた経験があったからこそ、定年後に農業という選択肢があったのでしょう。このことは、日本の農村における跡継ぎ問題、Uターン帰農に通じるものであると感じました。

#### ワーディ・ファーティマのナツメヤシ

片倉もとこ氏が撮影した昔の写真をみると、耕地の中にナツメヤシが生えていることが確認で

きます(写真⑥)。



写真⑥耕地に植えられたナツメヤシ (©国立民族学博物館、撮影：片倉もとこ)



写真⑦焼かれたナツメヤシ (©国立民族学博物館、撮影：片倉もとこ)

ワーディ・ファーティマのデザートは、地域の人々の貴重な「甘さ」であったことでしょう。しかし、「このごろの子どもたちは、なつめやしとらくだの乳の朝ごはんでは、いやだという。マーマレー

ドやジャムがいいらしい」(原文ママ)、というその当時の農民の愚痴も片倉氏の著書によって紹介されています(前掲書)。「近代化」に飲み込まれようとしている、ワーディ・ファーティマでの象徴的な出来事です。

また、枯渇した泉周辺のナツメヤシが、農民によって焼かれてしまった写真も、印象に強く残ります(写真⑦)。その理由は、ナツメヤシが貴重な地下水を吸い上げないようにするためでした(『アラビア・ノート アラブの現像を求めて』片倉もとこ 1979)

## ナツメヤシのゆくえ

今回の調査で気づいたことは、ナツメヤシがまったく植えられていない農地が多かったことです(写真①、②)。

ワーディ・ファーティマの人々にとって、ナツメヤシの重要性は低下してしまったのでしょうか。

前述の、ミシャルさんとアリさんの農場の一角にはナツメヤシが植わっています。

しかし、「昔は、ナツメヤシが富の象徴であったけど、手間がかかってしょうがない」と、ナツメヤシの栽培に消極的な姿勢が垣間見えていました。

そのいっぽうで、多くのナツメヤシが、積極的に栽培されている農場もあります(写真⑧)。



写真⑧ アリーさんが管理するナツメヤシ農場

そのひとつである、アリーさん(前出の「アリ」さんとは別人物)が管理する農場を訪ねてみました。

この農場を管理するのはアリーさんですが、農場主はワーディ・ファーティマ出身の企業家だそうです。アリーさんの立場は、いわゆるマネージャーです。アリーさんの下には2名の技術者(スーダン人、エジプト人)、そして10名程度の労働者(パキスタン人など)が働いています。

ナツメヤシが植えられている一画を調べてみると、19ものナツメヤシ品種を確認することができました。とはいえ、この農場の生産物も、積極的に市場で売るものではないそうです。アリーさんいわく、収穫したデーツの大半は「ザカート(喜捨)」として、人に施すのだそうです。

ワーディ・ファーティマでは、ナツメヤシと、人々の生活との距離は時代を経るにつれ、少しずつ遠くなりつつある印象をうけます。ところが、ワーディ・ファーティマの人々が日常的にデーツを食べていることは、家を訪ねると必ずデーツを出してくれることから容易に想像できます。そのデーツはどこから来るのでしょうか。話を聞いてみると、ナツメヤシ栽培が盛んな、メディーナ州やカシム州産が多いようです。この2地域への訪問は今後の重要な課題となりそうです。

## 世代を超えたフィールドワーク

ワーディ・ファーティマでのフィールドワークは、途に就いたばかりです。これまでの短い経験からでさえも、このフィールドワークは、世代を超えたものであることを感じます。片倉もとこ氏が交流を続けてきた人々の、子、孫世代とわたしたちとの交流が、このフィールドワークの起点となっているからです。日本人研究者による海外フィールドワークが活発化してから、早50年あまりが経ちました。当時の研究成果と人間関係(フィールドワーカーと地域の人々)を継承し、現代の視点からとらえなおす作業は、単に過去の研究をみつめなおす学術的成果を生み出すものにとどまらず、さらに50年後を見据えた研究資源、地域資源、異文化交流を生み出す行為でもあると実感しているのです。

石山俊(いしやましゅん)